

新・建築職人論

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

カッコイイ・バンド

自宅で仕事をする時には、音楽配信サイトにある程度お任せで音楽を流している。もちろん私の好みの音楽は記憶されているから、そう外れたものはかからない仕掛けになっている。

一月に鹿児島で女性技能者の方々と交流した翌日、いつもの調子で音楽を流しながら原稿を書いていたところ、久々にグッと来る曲が流れてきたので、誰の何だろうかと、隠れていた画面を見てみると、そこに映っていたのはある英国のアフロ・ジャズ・バンドのライブ映像であった。あまりのカッコ良さにし

ばし仕事の手を止めた。

バンド名はKOKOROKO、楽曲名は「コロナアル・メンタリテイ」。何がカッコイイって、八人編成のバンドの前面でメインのトランペット、サクソス、トロンボーンを吹きまくるのが若い黒人女性たちなのだ。リズム・セクションの男どもを引き連れて新しい音を奏でるそ

の逞しい姿に、建設現場の女性技能者もこんな風に堂々とカッコ良くやれたら素晴らしいだろうなと感じ入ってしまった。
鹿児島で一緒にした女性技能者の方々はすぐにこのバンドのことを伝えた。



(一社)女性技能者協会の方々とワークショップ、集合写真。前列左から3人目に前中会長、5人目に芝浦工業大学蟹澤教授、6人目につみき設計施工社河野さん、2人目に筆者。

ろうということ。そして第二に、従来の男性社会が疑うことなく持ち続けてきた価値観や、継続してきた様々な慣習に対して、男性社会のそれらに馴染んでいない女性からであれば、変えるべき事柄についての率直な意見がどんどん出てくるだろうということ。

これらの点では、一昨秋にほぼ一人で「(一社)女性技能者協会」を立ち上げた京都の電気設備工事士、前中由紀恵さんの意見も一致している。その詳細は三月に上梓した拙著「新・建築職人論」オープンもののづくり「ユニティ」(学芸出版社)に認めたので、そちらに譲るとして、前中さんとは昨秋初めてお目にかかり、女性技能者が建設業界を革新し得るといふ考えを共有し、大いに意気投合した。

その前中さんが、設計施工への住み手の参加に新たな価値を見出し、面白い事業モデルを形にして実践している「つみき設計施工社」の河野直さんと組んで、女性技能者のワークショップを開くというので、興味津々。私も参加した。

今回のワークショップのテーマ

は、女性技能者として、今の建設現場のあり方に言いたいことがあるれば、すべて吐き出すというものだった。なかなか改善されない現場のトイレや更衣室の使われ方の問題、「女のくせに」とか「女だから」といった言葉に代表される古臭いジェンダー観やそれに起因するハラスメント、女性固有の体調変化や妊娠・出産といった事柄への対応の不備、女性向きに作られていない工

具や装備の実状、そして待遇の問題等々、多くの改善すべき事柄が

休む暇もない程に指摘された。聞けば「こんなこと今まで誰にも言えなかった」とのこと。
積極的にこの世界に入って来る女性たちにその豊かさを楽しんでもらうべく、このような問題は可及的速やかに改善されねばならない。

大工三〇万人の時代

**女性たちが
言えなかったこと**
本連載で前にも触れたことがあるが、今私は女性技能者の可能性に大いに注目している。高齢化と減少の著しい建設技能者を補うものとしてではなく、建設現場のあり方、更には建設業のあり方に革新をもたらすものとしてである。

そう考える根拠は、第一に、男性社会であり続けてきた建設現場の世界に自ら飛び込んでくる女性は、多くの場合、建設現場のものづくりに憧れ、そこに参加したくて入職してきたのであり、その前向きな積極性こそが物事を変える力を持つた

昨年暮れに二〇二〇年の国勢調査での各職別の人数が明らかになったのだが、それによれば、遂に日本の大工の数は三〇万人を切った。四〇年前九四万人だったことからすれば、驚くべき減少である。これからの大工の世界を支えていくことになるであろう十代の大工の人数は二千を少し超える程度と、すこぶる心許ない状況だ。

待遇の改善はもちろんのこと、仕事の面白さや豊かさを広げられるように、関係者一同心してかからなければならぬ。そして、その時にはカッコイイ女性技能者たちが大きな力になってくれるに違いない。とにもかくにも期待している。

